

〈二月革命〉と文学の挫折

—ポスト・ロマン派作家たちの存在論的＝歴史状況—

柴田芳幸

La Révolution de février et l'échec de la littérature

— La Situation historico-ontologique des écrivains post-romantiques —

Yoshiyuki SHIBATA

マラルメと読者の関係についての研究において、ポール・ベニシュウは、マラルメの世代の前後の詩的諸世代の歴史、および彼が出現した時点におけるフランス詩の社会的状況とでも呼びうるものの歴史を強調しつつ、まさしくこう書いている。

一八五〇年以降、ロマン主義の退潮の中で、…ある歴史的大危機が、その時以来詩的使命と分かち難いように思われる悲観主義を大いに刺激し、しだいに詩の状況を支配する。詩人と人類の間の交感〔一体性〕というロマン主義的期待は、強迫的で苦い否定性にとって代われ、消え失せる。¹⁾

ベニシュウが遠回しな表現で語っている「ある歴史的大危機」とは〈二月革命〉とその反響に他ならぬ以上、マラルメと読者に関する彼の研究は、マラルメのアンガジュマン〔責任敢取〕に関するサルトルの研究を、両者間の見解の共通性において、想起させる。

実際、『マラルメのアンガジュマン』は、詩人が生きた時代環境の描写から始まる。

一八四八年。王政の失墜〔二月革命による七月王政の失墜〕は中産階級から、その「覆い」を奪う。それで〈詩〉はその伝統的な二つのテーマ、つまり〈人間〉と〈神〉とを失う。²⁾

ところで、このサルトルの文学的＝歴史的記述を、アンリ・ギユマンの『十二月二日のクーデター』——この書はカール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』に準拠している——のまったく歴史的な一節に対比することは許されよう。

王政の失墜は所有階級から、その数世紀来の「覆い」を奪ってしまった。一八四八年二月以降、社会的現実が赤裸に出現していた。³⁾

私たちはそれゆえ、同一の歴史的出来事に関する、ギユマンにおける社会的＝歴史的水準から、サルトルにおける存在論的水準への移行に気づく。かくして私たちは、サルトル的なアプローチは彼の存在論的＝歴史的分析によって特徴づけられる、と考えることができる。

いずれにせよ、サルトルによれば、ブルジョワ的武器である分析精神による一八四八年二月の王政の失墜は、〈詩〉をまず最初は〈神〉の死の前に、次に〈人間〉の死の前に導く。要するに、ベニシュウにとってと同様サルトルにとっても、「マラルメ問題」は歴史的に〈二月革命〉に遡る。この意味で、『家の馬鹿息子』が「ギュスターヴ・フローベール、一八二一年から一八五七年まで」という副題をもつと同様に、『序文』＝マラルメ』にまさしく『マラルメ（一八四二～一八九八年）』という題名がついているのは意義深い。『フローベール論』の場合、作者の生年と彼の最初の傑作『ボヴァリー夫人』の刊行年が副題の一部をなしている（伝記的方法の見地からすれば、サルトルの批評は、とりわけ作家を、その才能が最初の成功の際に構成されるまさにその時に、研究することをめざしているサント＝ブーヴの批評「この木にして、この実あり」を踏襲し、また発展させている。「その人が最初の傑作を産み出す結果になるように、多少ともゆっくりした、ないし容易な協力によって、彼の天才、教育ならびに周囲の情勢が一致したまさにその時に、その人間全体を把握し、理解し、また分析すること」）。⁴⁾しかるに『マラルメ論』の場合、詩人の生年と没年が題名を構成している。

サルトルによれば、作家とは何よりもまずその時代の息子であり（この時代にして、この作家あり）、そしてマラルメに関して言えば、彼は〈二月革命〉の頃から〈第二帝政〉の時代にかけて自己形成を果たし、パリコミュンを経て、世紀末まで生きのびた一人の徹底的な実存者である。サルトルがマラルメの全的責任敢取について語るのは、マラルメは彼が生きた時代と社会に対する詩人としての責任を最もよく引き受けた、とサルトルが考えているからに他ならない。かくして私たちは、マラルメは〈第二帝政〉の時代に生まれて詩人になり、この時代の社会的・歴史的諸条件を引き受けることによって〈詩〉を確立した作家であると、言うことができる。

この詩人を彼の文学的世代に位置づけることをめざしている『〈未定稿〉＝マラルメ』の第一部は、「一八五〇年の詩人たち」——彼らは『家の馬鹿息子』第三巻でサルトルが「ポスト・ロマン派の世代」⁵⁾と名づけるものに対応する——の歴史状況の存在論的分析に他ならない、なぜなら十九世紀の歴史的経験を特徴づける神殺しとその余波を分析するのが問題なのだから。サルトルは実際私たちに、〈帝政〉下および〈王政復古時代〉においてさえ進行した「フランスの非キリスト教化」⁶⁾は、〈七月王政〉下では既成事実であると指摘し、彼が「不信仰の洗礼」⁷⁾と呼ぶことに関してこう言う。

一八五〇年以降、信仰は否定の否定になる。何ものも、神が去った世界に私たちがいることを妨げることはできぬ。もし神の存在を信じたければ、それゆえ神の〈不在〉にもかかわらずであ

ろうし——才気をひけらかす人たちは、その不在の故に、と言うだろう——、そしてもし〈宗教〉の最終的勝利をあくまで予言しようとするならば、その恐るべき敗北を認めた後でなのだ。ところで一八五〇年の詩人たちは、彼らの骨の髄まで、無宗教の電撃的な進展がヨーロッパの歴史の中に作り出したこの断絶を感知していたのだ。⁸⁾

ポスト・ロマン派の世代が生きた歴史的時代はこうして〈神の死〉という出来事に要約される。たしかに、このサルトルの観点は、マラルメ（一八四二～一八九八年）がニーチェ（一八四四～一九〇〇年）とほとんど同じ歴史的時期を生きた——それゆえサルトルは『〈序文〉＝マラルメ』に、「ニーチェよりもさらに勝れて、彼は〈神の死〉を生きた」⁹⁾と書く——という事実だけでも、独創的ではない。だがサルトルは——彼にとって中産階級の飛躍的發展による王〔ルイ十六世〕の殺害と神の殺害とは、同一の歴史的出来事の、一方は社会的な、他方は存在論的な、二つの経験に他ならない（「自分の王を殺そうと自分の神を殺そうと同じことだった。要するに、中産階級とは〈神の死〉だったのである」¹⁰⁾）——私たちに見事に次のことを指摘する。中産階級は、ルイ十六世の処刑によって〈旧体制〉の貴族的支配階級に死刑を宣告しつつ、思わずこの行為の中で神殺しと親殺しを実行してしまった、つまり確かなあらゆる権威を抹殺してしまったのだ、と。そしてあらゆる権威の抹殺は結局、あらゆる価値基準——真、善、美など——の崩壊なので、〈神〉と〈人間〉（「〈神〉の息子ではないという大間違いを犯したこのぺてん師」¹¹⁾）を失ったロマン主義以降の、高踏派の〈詩〉は事実、詩的靈感それ自体を失わねばならなかった。

かつて信仰の最盛期には、とサルトルは言う、天賦の才能は平民の気品であった。神がその印を人の額につけていたのであって、詩人なのは神授権によることだった。靈感に関しては、それは〈恩寵〉の世俗的名称だった。要するに、この「詩人・予言者」¹²⁾はらっぱ手にすぎず、創造の息吹は神から来たのだ。一言で言えば、『家の馬鹿息子』第三巻におけるロマン主義的「長兄たち」の次のくだりが示しているように、そこでは靈感、天才、傑作という「全てが贈物である」ロマン派的三位一体の存在が信じられていたのだ。

作家は傑作——つまり挫折の埋め合わせ——というこの贈物をする、なぜなら彼は人間に世界を見せる力能〔可能態〕である天才というこの別の贈物を授かったのだから。そしてその天才は——再び贈物だ——靈感によって現実態として現れるのである。¹³⁾

反対に、ロマン派以降の作家たちの時代には、人々はもうこの三重の贈物の存在を信じてはいない。というのは「〈神の死〉がのりこえ難い葛藤の中にポスト・ロマン派を陥れようとしているのだから。神と共に実際、聖なる靈感は消滅する。…靈感を受けた文章体と共に、傑作というこの美しき予言的錯乱の中に現実化される天与の力能に他ならない天才は消滅する」。¹⁴⁾ だが人々は、ポスト・ロマン派の「神経症的解決」と題された章でサルトルが語っている、あの三重の挫折の存

在は信じている。〈客観的精神〉の諸矛盾によってポスト・ロマン派に課せられた——芸術家の、人間の、そして作品の——この「三重の挫折」が、消滅したロマン主義的三位一体——聖なる靈感の、天才の、傑作の消滅——にそれぞれ対応していることは言うまでもない。かくて「〈詩〉は技術になる」。¹⁵⁾それが〈言霊〉の消滅の直接的帰結なのだ。以上が「文章彫琢家」に必要とされる〈主意主義的芸術〉——「研究、科学、労働、的確な言葉の探究、正確な組合せの調整」¹⁶⁾——の起源である。単なる理論家であるルコント・ド・リール以上に、若きバカロレア合格者であり、もっとも華々しい天分に恵まれてもっとも怠惰なヴェルレーヌは、永久に高踏派を去る前に、『土星人の詩』の中で、この芸術の視点を説明していた。

われら〈至上の詩人たち〉、神々を崇めはするが
信じてはいないわれらにとって必要なのは、
その頭はいかなる光輪にも飾られず、
いかなるベアトリクス〔理想の女性〕も足を向けてはくれなかったわれら、

裁断のように言葉を彫琢し
感動的な詩句をととも冷静に作るわれら、
夜毎グループで仲良く湖畔へ出かけ
うっとりしている姿が見られぬわれら、

われらにとって必要なのは、ランプの微光の下、
知識の獲得と眠けの制御だ、
版画の老いたファウストの両手で被われた額だ、
〈粘り強さ〉と〈意志〉だ。¹⁷⁾

歴史的に言うと、靈感のこの拒絶、自らの産物への人間のこの平然たる犠牲、これこそ——『家の馬鹿息子』第三巻におけるサルトルによれば——「ブルジョワの人間嫌いの正確なコピー、一八四八年の間抜けども〔二月革命に裏切られた人たち〕が夢見るひそかではあるが不可能な大虐殺の、一言でいえば品位というあの人身御供の正確なコピー」¹⁸⁾なのである。

要するに、〈神の死〉と共に、靈感と天才の理論の存続が不可能になり、作品は「作者の労働が——商品におけるように——刻印される製品〔加工された産物〕」¹⁹⁾にならねばならなかった。しかしながらポスト・ロマン派の作家たちは同時に、ブルジョワ的実践の産物に対する彼らのロマン派の「長兄たち」の貴族主義的軽蔑と、十八世紀の彼らの「祖父母たち」の分析的否定性とを内面化していた。その結果、ポスト・ロマン派の「神経症的解決」とは次のことになる。

絶対的作品、この取り逃がした傑作は他所に、世界の外に、時間の外に、補償的未来に、純然たる非現実界に、存在しうる。²⁰⁾

ところで、これらのよき労働者たちをサルトルは「神なし子たち」²¹⁾と呼び、彼らについてこう書く。「彼らは〈壮大な難破〉を身体損傷のように感じ取った。地上にいることにぼう然自失して、彼らはなぜ生まれたのかが分からず、自らの偶然性を嫌悪している。」²²⁾『マラルメのアンガジュマン』のこのくだりが——偶然性の問題への言及によって——私たちを『嘔吐』の有名な一節に差し向けるのは当然であろう。それは主人公ロカンタンが〈公園〉のマロニエの根の前で実存的覚醒をえた場面である。

最重要なこと、それは偶然性である。それは定義上、存在は必然ではない、という意味だ。存在すること、それは単に、そこにあることだ。存在者は現れ、互に出会うがままになるが、決してそれは導き出せない。…偶然性とは消散しうる単なる見せかけや外観ではない。それは絶対、したがって完全な無根拠なのである。この公園、この町、それに私自身、全てが無根拠である。たまたまそのことが分かると、それはあなたの胸をむかつかせ、全てが漂い始める、…それこそが〈嘔吐〉なのだ。²³⁾

自らの偶然性を〈壮大な難破〉のように感じ取ったこれらの「神なし子たち」の一人であるアントワヌ・ロカンタン、時には彼は「漠然としたよけいな生命」²⁴⁾が己の中に繁殖するのを感じ、その豊かさにぞっとする（「原因不明の存在たちのこの過剰に打ちのめされ、ぼう然自失して、私はベンチの上に身をゆだねた。いたる所に孵化や開花があり、私の耳は存在がブンブンうなっており、私の肉体そのものもピクピクと痙攣してパツクリと口を開け、宇宙の発芽に身を任せていた。それは忌まわしかった」²⁵⁾）、また時には彼には、「感知し難い死」²⁶⁾が人間たちと事物に忍び込んできたように思われる。（「その上に私が座っており、その上に私が手を押し当てたこの物は、腰掛けと呼ばれる。…空中に向いた、血だらけのふくれたこの巨大な腹——死んだ脚を持ち、この箱〔電車〕の中、この灰色の空に漂っている腹、それは腰掛けではない。それは同様に、例えば、灰色の大河、氾濫した大河に腹を空に向けて漂流している、水脹れした死んだロバでもありえよう。そして私はと言えば、ロバの腹の上に座っており、足は澄んだ水の中に浸っているのかもしれない。事物はその名前から解放された。事物はそこにある、グロテスクに、頑固に、巨大な姿で。そしてそれらの事物を腰掛けと呼んだり、それらについて何かしらを言うことはバカげているように思える。私は事物、名づけられぬもの、のただ中にある。」²⁷⁾）。

もっとも『嘔吐』の主人公や『存在と無』の作者よりずっと前に、この神秘——その偶然的様相の下に赤裸になった〈存在〉の充満——を見出すべき運命にあったのはマラルメ——「一八五〇年の詩人たち」の継承者——である。マラルメ——彼について事実ポール・ヴァレリーはこう語って

いる、「これほど精確に、これほど粘り強く、これほどの英雄的確信をもって、その外には偶然しか見出さなかった〈詩〉の卓越した尊厳を公言した人は誰もいなかった・・・」²⁸⁾——は〈詩〉の外界を、すなわちこの現実世界の全体性を、偶然が支配する宇宙とみなしていた。私たちの外界には偶然しかないという考えがマラルメ的世界像の中心にあり、その活版印刷上の創意工夫によって並はずれた詩篇『骰子の一擲は決して偶然を廃棄するまい』は、大荒れの海のまにまに激しく揺れる大型船のイメージによるその考えの言語的形象化である。

このようにして偶然が支配する外的世界と、そこでは「偶然が一語一語征服される」²⁹⁾〈詩〉とのマラルメの対立は、『嘔吐』における偶然性、不条理、無根拠に他ならぬ「存在」と、その内的必然性が一貫している「楽曲」（「古びたラグタイム曲」が私に与えてくれる「奇妙な幸福」³⁰⁾）とのサルトルの対照に相応する。マラルメの世界像とロカンタンの実存的覚醒との類似は、マラルメにとって〈詩〉の理想像は〈音楽〉に他ならなかっただけに、私たちにはますます強固であると思われる。

ところで『〈未定稿〉＝マラルメ』において、サルトルはポスト・ロマン派作家とそのロマン主義的長兄たちとの対照を、前者における神の不在を強調することによって、浮き彫りにしている。「彼らは神の現存を崇めていたが、彼はその不在を嘆くだろう。彼らは〈神性〉によって照らされた〈宇宙〉を見せてくれたが、彼はこの光の消滅を、世界に広がる暗闇を見せるだろう。彼らは自らの中にあるこの〔存在の〕充満のことで〈神の摂理〉に感謝していたが、彼は己の中に感じる空虚のことで全人類を告発するだろう。」³¹⁾ 他方ポスト・ロマン派のそのロマン主義的長兄たちに対するこのような否定的関係は、サルトルと『嘔吐』の数場面に具現されている彼の象徴主義的長兄たちとの関係に対応してはいまいか。

例えば、ロカンタンは公園におり、そこのマロニエの根の前で存在の偶然性をちょうど発見したばかりだが、不確かでかすかな動き〔運動〕を感知する。風は木の梢を揺さぶっていた。彼は枝の揺れを見守りながら、心ひそかに思う。「運動はけっして完全には存在しない。それは移行、二つの存在の間の仲介、わずかな時間である。」³²⁾ この運動は事物の偶然性を否定しているように見える、しかしながらそれは主人公の望みをそっくり明かしている。「もちろん、運動は木とは別物だった。しかしそれはやはり一つの絶対だった。一つの物だ。」³³⁾ というのは実在する風による木の震えは、可能態から現実態への移行であるようには彼には見えず、震えという物のように見えるのだから。彼はそこから「存在には記憶がない。死者たちについて、存在は何もとどめない——たった一つの思い出さえも」³⁴⁾ と結論する。

『嘔吐』のこの場面は、あらゆる事物の偶然性が、まったくベルクソンの観念である移行＝運動も思い出＝記憶も飲み込んでしまう限りにおいて、ベルクソンの『哲学的直観』の否定であることは明白である。

少し先のところで、私たちはポール・ヴァレリーへの示唆によって興味深い樹木の描写を読むことができる。

それどころか、この多量さは実りの豊かさという印象を与えなかった。それは陰気で、ひよわで、それ自体に困惑していた。これらの木々、これらの不器用で大きな胴体〔幹〕…。私は笑い出した、なぜなら書物の中に描かれている、きしみ音、破裂音、巨大な開花でいっぱいのものすごい春のことを突然考えていたからである。…円形脱毛症の斑点のついたこのプラタナス、半ば腐っているあの柏、それらを私が、空の方に突出する荒々しい若い力と取り違えて欲しかったのである。それではこの根は。たぶん私はそれを、大地を引き裂き、そこから糧を奪い取る貧欲な瓜として表象する必要があったのだろうか。事物をそんなふうに見ることは不可能だ。軟弱、脆弱、そうだ。木々は漂っていた。空への突出か。むしろ意気消沈だ。たえず私は、木の幹がくたびれたペニスのようにしわがよって縮こまり、ひだのついた黒くて柔らかい塊として地面に倒れるのを見る覚悟をしていた。…あらゆる存在者は理由なく生まれ、弱さによって存続し、出会いによって死んで行く。…存在とは人間が離れられぬ充満である。³⁵⁾ (強調は引用者)

『嘔吐』におけるたわんだ樹木の言説を、春の到来とそれに伴う樹木の再生を歌う『若きパルク』の次の詩句と比較してみよう。

驚くべき春が笑い、侵入する…どこからともなく。
だが純真さがとても甘い言葉であふれ出るので、
愛情が大地をその奥底で捉える…
再びふくらみ、鱗片葉で覆われた木々は、
たくさんの腕〔枝〕と多すぎる視界で一杯になり、
太陽の方にその雷鳴のような密生した毛髪〔若葉〕をゆさぶり、
新緑と感じられる無数の葉叢の全ての翼で
苦い大気の中を昇って行く…³⁶⁾

それゆえサルトルの「樹木」がヴァレリーの「樹木」のテーマの否定と考えられるのは明白である。実際ベルクソンとヴァレリーにおける生氣論的世界像からサルトルにおける実存主義的世界像への移行が問題なのである。事実、ヴァレリーとベルクソン、彼らはその時代に「中産階級が新しい楽天主義的な思想体系を作り出した」³⁷⁾〈第三共和政〉と運命をともにしたフランスの大家たちであるのに対し、サルトルは、周知の〈経済危機〉が勃発した両世界大戦間に自己を形成した——彼の男女の友人たちが保証しているその陽気さと寛容さにもかかわらず——孤独な思想家なのである。〔以上の象徴主義とサルトルに関する考察は、筆者の日本における大学院時代の指導教授であり恩師でもあった故・平井啓之氏の論考を充分検証し、その影響をスポンジのように消化・吸収したものであることは、言うまでもない。〕

それゆえサルトルは彼の長兄たち——ベルクソンとヴァレリー——が選んだのと同じ対象を描

いていると思われる、だが凹型でなのだ。要するに、ロカンタンにとってもポスト・ロマン主義の「一八五〇年の詩人たち」にとっても、「〈物質〉だけが〈真理〉なのだ。」³⁸⁾ 神は彼らの癒やし難い傷である。この視点から見れば、『嘔吐』は「体験された〈神の死〉」³⁹⁾ に他ならない。

ところで『言葉』を読むと、ジャン＝ポール少年における〈神の死〉の経験に関する情報がえられる。この若き主人公の場合によっては生じうる宗教への熱狂をはばむのにかなり適したある社会階層の存在という明白な事実を、少なくとも認めよう。というのは彼の家庭は、「ヴォルテール風の資本家階級に生じ、一世紀かかって社会の全階層に広がった非キリスト教化のゆっくりした運動」⁴⁰⁾ に侵されていたのだから。彼の環境や家庭においては、「信仰とは甘美なフランス的自由のための式典用の名称にすぎなかった」⁴¹⁾。第一に、プロテスタントである彼の祖父は、「前線での侵攻時以外には、ほとんど、〈神〉のことを考えなかった。今わの際に〈神〉に再会することを確信して、自分の生活からは遠ざけておいた」⁴²⁾ のである。次に、どちらかといえばカトリック教徒である彼の祖母は、「何も信じていなかった。ただ彼女の懐疑主義のせいで、無神論者にならずにすんだ」⁴³⁾ のである。最後に、彼の母には「〈彼女だけの神〉がいて、その神にはひそかに自分を慰めてくれることしかほとんど求めなかった」⁴⁴⁾。それゆえサルトルは言う。

私はカトリック教徒でプロテスタントだった。私は服従の精神に批判的精神を加えていた。実際は、こうしたことすべてに私はうんざりしていた。つまり私は教義同士の衝突によってではなく、自分の祖父母の無関心によって無信仰に導かれたのである。⁴⁵⁾

結局、まさしく——フランシス・ジャンソンが指摘しているように——「敗北主義的でいんちき臭いこの種の『信仰』（その唯一の深い動機は無信仰の拒否であった）」⁴⁶⁾こそが、ジャン＝ポールを任意の神とのあらゆる関係から引き離したのである。

しかしながら次のことをよく銘記しよう。父の不在と相関的な〔自己〕正当化の欠如を強く感じていたこの父なし子、虚無の息子は、全能の創造者の計画通りに永久に自らに授けられるであろう役割の上に自分の偶然的実存を確立するために、〈神〉を必要としていた。「私は宗教を予感し、期待していた。それは解決策だった。だかもし宗教を拒まれたら、私は自分でそれを考案していたことだろう。」⁴⁷⁾ ところで、事實は、彼に宗教を提供することによって、人々は彼の眼に宗教の信用を剥奪しただけだった。しかしサルトルは、「公式の教義」とその「偽善的なパリサイ人の〈偶像〉」によって、彼自身の信仰の探求に嫌気がさしたと言いつつ、まさしくこう書いている。「この勘違いがなければ、私は今ごろ修道士になっていることだろう。」⁴⁸⁾ こうして「神秘的で比較的孤独な形式の〈神〉への関係」⁴⁹⁾を強調することによって、彼は『言葉』のやや先のところで、自らの観点をよりいっそう明確にしている。

私はこの世の財産など何も所有していなかっただけに、ますますそれを超越する気になってい

た。それで私は自らの心地よい貧窮の中に、たやすく自分の召命を見出したのかもしれない。神秘主義は国外亡命者や定数以上の子供たちには適している。・・・私は聖性の餌食になるおそれがあった。⁵⁰⁾

換言すれば、一つの役割——その意味自体が何らかの拒みえない〈意識〉によって保証されていたはずの一つの役割——を果たすのに、彼は自分が選ばれている、委任を受けている、指名されている、と感じる必要があったのだ。定数以上の「余分な」この子供における〈神の存在〉の試練はこうして、父の不在を経て、「委任状」のテーマに変貌する。

したがって、『マラルメのアンガジュマン』でサルトルが、〈神の不在〉を経たポスト・ロマン派の一八五〇年の詩人たちを人身御供の選ばれた犠牲とみなすのは、彼が多少とも彼らと一体化しているからだ。「これらの若者たちは在俗信者なのである。彼らは、〈天〉と〈地〉の間で演じられる悲劇には人身御供が含まれており、自分たちこそその選ばれた犠牲者だという感情を抱いている。彼らはこの犠牲的行為を望むことに決めたのである。彼らは癒やし難く、またそうであることを望む必要があるし、彼らの全生涯が喪に他ならぬことが必要である。」⁵¹⁾ 事実『言葉』において、自らの書き方入門に際して、彼の祖父（「十九世紀の人間」⁵²⁾）の時代遅れの思想——〈神性〉と〈文化〉の混成物に他ならない〈聖霊〉の思想——の彼への影響を語った後に、サルトルはまさにこう書いている。

私は自分のものではなく、ましてや祖父のものでもない怨恨や気難しさを吸収し、フローベールやゴンクール兄弟やゴーチエの古びた怒りに毒された。彼らの人間への抽象的な憎悪は、愛の仮面をかぶって私の中に入り込み、私を新たなうぬぼれに感染させた。私はカタリ派〔中世キリスト教の異端派〕になり、文学と祈禱を取り違え、それを人身御供にした。・・・私もまた、自らの神秘的な奉納によって、自分の作品によって、人類を深淵の縁で支えるだろうに。そっと軍人が司祭に席を譲っていたのだ。悲劇的なパルシファル〔中世の『アーサー王伝説』で「聖杯」を探しに出かけた騎士〕である私は、贖罪の生贄として進んでわが身をささげていたのだ。⁵³⁾

それゆえ、『未定稿＝マラルメ』におけるポスト・ロマン派作家たちのサルトル的解釈は、『言葉』の中に描かれた、人身御供の選ばれた犠牲という自分自身の感情を、彼が彼らに投影している限りにおいて、私たちには主観的に思われるが、それはまた、この「神託の子供」⁵⁴⁾における「宗教としての〈文学〉」⁵⁵⁾というテーマが、彼の祖父を介して、歴史的に十九世紀の思想から彼に到来する限りにおいて、客観的でもあるのだ。だから、サルトルは私たちに、神なし子に他ならない一八五〇年の詩人たち——彼らはいくまで、神は存在すべきなのにと言い張る——における「無神論以後のキリスト教」⁵⁶⁾を特記するのだが、逆に彼の文学的育成がそれ自体歴史的に、「敗北を勝利に転換しよう」とつとめる「この撤退大作戦」⁵⁷⁾の中に位置づけられるのは疑いの余地がない。

その証拠は次の『言葉』からの二、三の引用である。

カトリック教から天引きされた聖なるものは〈文芸〉の中にたまり、文士が現れたが、それは私になりえなかったキリスト教徒の代用である。⁵⁸⁾

私は〈文学〉に身をささげていると思っていたが、その時、実のところは、修道会に入っていたのだ。もっとも謙虚な信者の確信が、私の中で、自らの宿命〔救霊予定〕の高慢な明証になった。救霊予定者か——もちろん。キリスト教徒はみんな選良ではないのか。私はカトリック教義の腐植土の上に、伸びほうだいの雑草として成長していた。私の根はそこから汁をすいあげ、それを自分の樹液にしていた。⁵⁹⁾

一九一七年のある朝、ラ・ロシェルで、…私は〈全能の神〉について考える決心をした。…神は存在しない、と私は丁重に驚いて心ひそかに思い、その問題は解決されたと信じた。…しかし〈他のもの〉が残っていた。〈不可視のもの〉、〈聖霊〉は、私の委任を保証し、匿名の聖なる大きな勢力によって、私の生活を牛耳っていたものである。⁶⁰⁾

そのようなわけで、『未定稿』＝マラルメ』においてサルトルが、この新＝キリスト教の真の信者たち——一八五〇年の詩人たち——に関して、「彼らは自らの衰退への同意によって、〈神なき人間〉は不可能であることを証明するであろうし、「無神論のかなたのこの自己＝破壊こそ、〈神的存在〉の——背理法による、そして明白さに逆らった——証明のようなものであろう」⁶¹⁾と言うのは、彼が、自ら「挫折行動としての信仰」⁶²⁾と呼ぶものを、多少とも継承したからである。『嘔吐』——その主人公ロカンタンは不可能な人間に他ならない——を吐いた『言葉』の選良は、実際こう書いている。

のちに私は、人間は不可能であると陽気に述べた。自分自身不可能である私は、この不可能性を表明する唯一の委任によってのみ他者たちとは違っていた。それでこの不可能性は変貌して、もっとも内心の私の可能性、私の使命の対象、私の栄光の踏み台になった。…独断家である私はすべてを疑っていた、懐疑に選ばれた人であることを除いて。⁶³⁾

それゆえサルトルは〈神の死〉のテーマについて、『マラルメのアンガジュマン』の中で、一時的にこう結論する。「詩は〈宗教〉の挫折を苦悩のうちに生きるために、自らが挫折であることを望んだのだ。」⁶⁴⁾ 宗教の挫折と相関的な、文学の挫折というこのサルトル的思考方が、『家の馬鹿息子』第三巻における「三重の挫折」という観念と通底していることは言うまでもない。^{*}

(しばた よしゆき・高崎経済大学地域政策学部教授)

[註]

- (1) Paul Bénichou, "Mallarmé et le public" in *L'Ecrivain et ses travaux*, Librairie José Corti, 1967, p. 79.
- (2) J.-P.Sartre, "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*(1979), p. 169.
- (3) Henri Guillemin, *Le coup du 2 décembre*, Ed. Gallimard, 1951, p. 25.
- (4) Sainte-Beuve, "Pierre Corneille" in "Portraits littéraires", *Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1956, pp. 678-9.
- (5) J.-P.Sartre, *L'Idiot de la famille*, tome III, Gallimard, 1972, p. 108.
- (6) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 169.
- (7) *Ibid.*, p. 170.
- (8) *Ibid.*
- (9) J.-P.Sartre, "Mallarmé (1842-1898)" in *Situations*, IX, Gallimard, 1972, p. 200.
- (10) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 169.
- (11) *Ibid.*, p. 170.
- (12) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 126.
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*, pp. 182-3.
- (15) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (16) *L'Idiot de la famille*, tome III, p.379
- (17) Paul Verlaine, *Epilogue de "Poèmes saturniens"* in *Œuvres poétiques complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1962, p.95. Cf. "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171., *L'Idiot de la Famille*, tome III, pp. 379-380.
- (18) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 381.
- (19) *Ibid.*, p. 183.
- (20) Eveline Pinto, "La névrose objective chez Sartre" in *Les Temps Modernes*, n^o 339, p. 74. Cf. *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 184.
- (21) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (22) *Ibid.*
- (23) J.-P. Sartre. *La Nausée*, Ed. Gallimard, 1938, p. 181.
- (24) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (25) *La Nausée*, p. 183.
- (26) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (27) *La Nausée*, pp. 173-4.
- (28) Paul Valéry, "Stéphane Mallarmé" in *Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1957, p. 622.
- (29) Mallarmé, "Le Mystère dans les lettres" in *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1945, p. 387.
- (30) *La Nausée*, p. 208.
- (31) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (32) *La Nausée*, p. 182.
- (33) *Ibid.*, p. 183.
- (34) *Ibid.*
- (35) *Ibid.*, pp. 184-5.
- (36) Paul Valéry, "La Jeune Parque" in *ŒUVRES I*, p. 103.
- (37) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 382.
- (38) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
- (39) *Ibid.*
- (40) *Les Mots*, p.79.
- (41) *Ibid.*, p. 80.
- (42) *Ibid.*
- (43) *Ibid.*, p. 83.
- (44) *Ibid.*
- (45) *Ibid.*, pp. 81-2.
- (46) Francis Jeanson, *Sartre (Les écrivains devant Dieu)*, Desclée De Brouwer, 1966, p. 43.
- (47) *Les Mots*, p. 78.
- (48) *Ibid.*, p. 79.
- (49) Francis Jeanson, *Sartre*, pp. 43-4
- (50) *Les Mots*, p. 81.
- (51) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.

- (52) *Les Mots*, p. 49.
 - (53) *Ibid.*, pp. 148-9.
 - (54) *L'Idiot de la famille*, tome I, p. 272.
 - (55) Francis Jeanson, *Sartre*, p.65.
 - (56) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 171.
 - (57) *Ibid.*
 - (58) *Les Mots*, pp. 207-8.
 - (59) *Ibid.*, pp. 208-9.
 - (60) *Ibid.*, p. 209.
 - (61) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 172.
 - (62) *Ibid.*
 - (63) *Les Mots*, p. 210.
 - (64) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 172.
- * Cet essai n' est qu'un petit morceau, traduit par l'auteur, du 4^e chapitre de la thèse de doctorat de III^e cycle sur J.-P. Sartre, soutenue à l'Université de Provence en 1984.